

平成30年度学校評価総括表

奈良県立登美ヶ丘高等学校

教育目標	自他敬愛に基づく協調の精神に富んだ心豊かな人間性を育成するとともに、自ら定めた目標に向かって意欲的に取り組む態度を育てる。		総合評価
運営方針	日々の学習活動を大切に生徒の進路実現を目指すとともに、学校行事や部活動を通して「知・徳・体」のバランスのとれた生徒を育成する。		
平成29年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標	4
学校行事においての司会進行など、生徒を主人公として前面に押し出した取組は周囲からも高い評価をいただき、生徒の成長も確認できた。今後本校教育の特色の一つとして位置づけ発展させたい。 1年次からのキャリア教育の推進によって、自らの目標を明確にし、主体的・積極的に取り組む姿勢を育成したい。生徒の学力向上のために「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善や、観点別評価等について、各教科はもちろん学校全体で創意工夫しながら取り組み、教員の授業力のさらなる向上を目指す。各課題に対する教員の資質を高めるための研修を実施するなど、教員間の連携を強めて、一層の組織力強化に向けて取り組みたい。	キャリア教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育のあらゆる活動を通して、将来のビジョンを描くことができるように進路指導を充実させる。 規範意識を高め、信頼される人間の育成を図り、コミュニケーション能力を向上させる取組を推進する。 	
	学習意欲と学力の向上 自立した学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ早く進路目標を設定させ、目標達成のためにHRや個人面談を充実させる。 基礎基本を大切にし、論理的思考力・表現力・判断力を育成するために授業改善や工夫を図る。 	
	グローバル人材育成(国際理解)の推進	<ul style="list-style-type: none"> グローバルなコミュニケーション能力を高めるために、英語教育を重視する。 郷土の歴史や風土を知り、郷土を愛する精神を育成する。 	
	地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 本校教育活動に対する地域住民の理解を得るための取組を推し進めるとともに、地域の持つ教育力を積極的に取り入れる。 開かれた学校としてあらゆる機会を利用して情報を発信する。 コミュニティスクール化に向けた取り組みを始める。 	
	学校の組織力の強化と教育力の向上	<ul style="list-style-type: none"> 目標達成状況や課題の共有化・焦点化を図り、解決に向けた方策を探る。 「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善を積極的に図る。 学校評価を活用し、外部評価を念頭に置いた改善を図る。 教育相談体制の構築による生徒支援体制をさらに強化する。 	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価 (4段階の段階)	成果と課題	改善方法	学校関係者評価
第1学年	生徒が楽しく通学できる環境づくりを行う。	生徒・教員全員が集団意識を持って取り組む。	4	(成果)個々の生徒の持つ課題を共有して、それぞれの生徒に適した支援を粘り強く行うことができた。 (課題)情報の共有に時間がかかることがあった。担当者間の連携だけでなく学年全体として常に個々の生徒の状況を把握できるようにする必要がある。	不登校傾向の生徒や教室に入りづらい生徒について、支援の方向性を日常的に確認し合う。	
		円滑な情報伝達と共有、協力(報告・連絡・相談)。	4			
	登美高生としての自覚を持たせる。	基本的な生活習慣(遅刻・欠席・提出物等)を身につけさせる。 挨拶の励行。 部活動への積極的参加を促す。	3			
	目標設定とそれに向けた自主的な取り組みを行わせる。	具体的な将来或いは進路の目標を設定できるように導く。 基礎学力の定着を目指す。	3			
第2学年	生徒が不安無く学校生活を送れる環境づくり。	欠席・遅刻生徒への対応を丁寧に行い、常に状況把握に努める。 円滑な情報の伝達と共有、協力(報告・連絡・相談)に努める。	4	(成果)不登校傾向の生徒や心に不安を抱える生徒に対し丁寧な対応と情報共有を行うことはできている。 (課題)常に予備軍を抱えている状態の中、早期発見による事前対応が求められる。	不登校傾向およびその予備軍の生徒に対しては、学年内での情報共有を密に行うと共に、教育相談支援室およびスクールカウンセラーとの連携を更に図っていきたいと考えている。	<全般について> ◎平成29年度の成果と課題が本年度の重点目標につながると思われるが、「地域との連携」が触れられていないのは残念なので、次年度は検討いただきたい。 ◎知情意のうち、情にあたる心の教育を充実するよう努めてほしい。そのためには、それぞれの言葉を教員自身の頭で考えることが大切だと思う。 ◎中学校関係者として高等学校へ学校評議員として来させていたたくのは、中高のつながりや一貫性の観点からも大切だと感じる。是非とも来年度以降も継続をお願いしたい。 ◎中学校の育友会に対する学校説明会は、高等学校を知ってもらう上で大切だと思う。 ◎学校評議員として来校するまでは、近くて遠い学校だったが、秋風のコンサートや文化祭への参加とおして、近くて近い学校になった。 ◎バス停などでもマナー良く並んでおられる、落ち着いた学校という印象を持っています。ただ、一部の生徒さんの中には公共交通機関を利用した際、優先座席を譲らない生徒さんというところも、ご指導は大変だとは思いますが、今後ともマナー向上に向けて指導を継続されることを望む。
	第2学年としての立ち位置を意識した学校生活を送らせる。	基本的な生活習慣や規範意識を大切に、後輩の見本となる行動(登美高生としての自覚ある行動)がとれるように導く。 学校行事、クラブ活動、学級活動への参加を周囲との関係を整えながら積極的に行っていく姿勢を身につけさせる。 総合的な学習の時間を通して、責任ある取り組みと協力して活動する姿勢を育てる。	3			
	目標設定とそれに向けた自主的な取り組みを行わせる。	毎日の家庭学習確保のために、課題の出し方を工夫する。 具体的な将来或いは進路の目標を設定できるように導く。	3			
			3			
第3学年	健康的で規律正しい学校生活を送らせる。社会に出て行くにふさわしい自立心をもった人間形成を目指す。	生活状況を的確につかみ、必要な助言や指導を行う。家庭と連絡を密にし欠席・遅刻が5回を超えないよう個々に応じた指導を行う。	3	(成果)個々に応じた必要な助言を行った。 (課題)進路の迷いや体調不良などで欠席・遅刻が2年次よりも増加した。	家庭と連絡を取り合い、細やかに指導を続ける。	
	進路についてしっかり考えさせ、自らの目標に向かって、向上心を持って学習に取り組むよう指導する。授業に集中して取り組ませ、家庭学習を充実させる。	CTと「総合的な学習の時間」を活用して、進路についてしっかりと考えさせる。実力養成講座を充実させ、継続率50%を維持できるような魅力ある講座をめざす。 進路実現のための、基礎学力と応用力を身につけ、集中して学習に取り組めるように指導する。自習室の指導体制を徹底させる。	4			
	積極的に学校生活に取り組み、連帯感・協調性を高める。他者と支え合える社会性を身につけさせる。	学校行事に積極的に取り組み、責任を果たす大切さ、協力する素晴らしさを体得させる。 部活動に引退まで取り組み、達成感の中での人間的成長を促す。 さまざまな学校生活の中で互いの違いや個性を認め合いながら、進路実現に向けてクラス全体で努力できる仲間づくりにつとめる。	4			
			4			

総務企画部	教育体制の整備と教職員の指導力向上に取り組む。	厳粛で温かみのある入学式・卒業式および着任式・離任式、規律のある始業式・終業式・修了式を企画運営する。	4	4	4	(成果)入学式等は厳粛で心に残るものとなり、始業式等は生徒の集中した態度の中、学期の節目にふさわしい規律ある式が実施できた。 学校評価計画の目標・方策を明確で簡潔なものに精選し、集中的に課題に取り組めるようにした。教育活動の点検が細かくできている。 保護者アンケートの結果から、学校の活動へのプラス評価が80%を超えている。 語学研修は参加者の満足度が90%を超え、大きな成果をあげた。事前学習や事後報告会も充実度を増している。また参加希望者が増加している。 (課題)入学式等の式典の運営については、新高校に向けてのビジョンを見据えて再考する時期である。 保護者アンケートの回収率が50%にとどまっているので60%にあげたい。	新高校の目標とビジョンを明確にしたうえで、評価計画を改善し、式典やアンケートの実施内容・方法についても再考する必要がある。 語学研修については、希望者が増加する中、実施方法・内容の見直しと新分掌への移行をスムーズに行う必要がある。 行事については、他分掌や関係機関と連携をとり、分掌や教員の協力体制を密にし、学校全体を活性化し、一体感を高める。		
		学校評価計画表を作成し総括会議を主催することで、本校の教育活動を点検し、教職員の指導力向上を目指す。	4						
		各種アンケートを実施し、保護者・生徒・外部関係者等の本校への評価を明らかにし、結果を教育活動に反映させる。	4						
		オーストラリア語学研修の企画運営と事前研修・準備の中心的役割を担い、グローバル人材の育成・国際理解教育の推進に努める。	4						
育友会・各種団体・同窓会との連携を深める。	育友会・各種団体との円滑で緊密な連携と協力体制を築く。育友会活動への保護者の積極的な参加を働きかけ、組織の活性化を図る。	4	4	4	(成果)保護者の育友会活動への理解と協力により、会議・研修への参加体制がきっちりできていた。 今回の試みの授業公開時の教育相談講演会に多数参加していただけた。 (課題)育友会総会への参加人数を増やすため、講演会の内容の検討が必要である。また、同窓会の参加人数を増やす手立てや広報活動が必要である。	登美ヶ丘高校の育友会・後援会等の各種団体・同窓会が長年培ってきた伝統・実績を大切にしながら新高校に向けての新しい体制につなげていく。			
	定期的な監事会を実施し、監事間の連携で同窓会活動の活性化を図る。	3							
	開かれた学校として本校の活動を広報し、教育活動の周知に努める。	4					4	(成果)生徒が運営するオープンスクールは800名の参加で、中学生・保護者の高い評価を得た。『碧き風』は内容が精選され好評である。HPは充実度が増し、発信回数も増加し、広報・案内・連絡に大いに活用できた。	新高校に向け、『碧き風』・「オープンスクール」・「ホームページ」の持ち方を検討していく。
学校案内誌『碧き風』の充実、生徒中心で運営するオープンスクールの企画、学校ホームページの積極的活用を通じて、本校からの情報発信と広報活動を推進する。	4								
教務部	対話的な形態を取り入れた授業をすべての教科で実施するとともに、研究授業や研修機会の充実を図り、生徒の学力向上を図る。	4	4	4	(成果)生徒の主体的な学びを推進する対話的で、情報機器を活用した授業の公開を学期に2回実施し、学びの意欲を高める授業のあり方を共有できた。 (課題)来年度導入の校務支援システムへのスムーズな移行に努め、新高校のカリキュラムとの共存という視点から観点別評価についてさらに研究を進めていく必要がある。	校務支援システムの研修を年2回実施するとともに、新高校が目指す探究型の授業像を探りながら、夏期休業中に観点別の評価規程を示すルーブリックやシラバスの研究を本格化させる。			
	シラバスを活用した観点別評価をすべての教科で推進し、生徒一人一人に応じた手立てを探究することで授業改善を図り、生徒の学習意欲を高める。	3							
	教員の連携を密にして培う力の共通理解を図ることでPDCAサイクルを効果的に機能させ、生徒のコミュニケーション・プレゼンテーション能力を高める。	3							
	グローバル人材の育成を目指して外部講師の招聘や教材の厳選を図り、生徒の探究的な活動を活性化し、生徒の国際理解への関心・意欲を高める。	3					4	(成果)大学教授や地域の方に外部講師として指導いただいたり、情報室や第2情報室などを活用して、生徒の主体的な調べ学習を促進できた。 (課題)新学習指導要領の「総合的な探究の時間」の導入に伴う「探究」活動のあり方を研究するとともに、新高校との学習内容の連続性を模索する必要がある。	「グローバル人材の育成」という本校の教育目標に沿った指導のあり方や年間計画を具体化し、探究活動充実のための条件整備や職員研修の充実を努め、特に新1年との連携を深める。
授業時間の確保と少人数授業の推進	4								
時間制の変更や考査前の授業調整を円滑に行い、各教科間においてバランスのとれた授業時間を確保する。	4								
「グローバル・イングリッシュ」等の少人数授業の特性を生かすとともに、特別教室の活用を工夫して、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を推進する。	3	4	(成果)考査前、早めに授業時間の調整を実施し、ある程度授業時間を確保することができた。職員アンケートでも良好な意見をいただいた。 (課題)来年度は1年後に開校する新高校のカリキュラムも具体化される。それに伴う教室使用や時間割調整について研究する必要がある。	新高校の担当者との連携を深め、特に学際科目を中心とした少人数授業の1年後の姿をイメージし、本校のカリキュラムとの共存を図るための有効な手段や教室共用のあり方をシミュレーションする。					
基本的な生活習慣の確立とマナーの向上をめざす。	遅刻を最小限におさえ、年間全学年1.5%未満を目標とする。				3	3	4	(成果)全体として1学期1%、2学期2.1%の遅刻率となった。今後も遅刻の減少を目指して取り組まなければならない。また、昇降口・通学路指導は計画通りにすすめることができた。 (課題)自転車のマナー向上のため、更に指導をすすめる。	全校朝会は学期ごとに実施し、昇降口指導・通学路指導・生徒指導部によるセブンイレブン前の立哨指導の強化をする。
	学期に一回の全校集会と毎日ショートホームルームでの指導を行う。				3				
	週3回の昇降口指導、週1回の中登美ヶ丘6丁目の通学路指導を行う。				4				
	1学期に1回の自転車集会、2学期に1回の自転車点検を行う。	3							
『生徒が、瞳を輝かせ、胸を張って、笑顔で登下校』を目標に、生徒理解に努める。	生活委員会による学期に1回の挨拶運動を行い、挨拶の励行をすすめる。	4	4	4	(成果)「いじめアンケート」「こころと学校生活等に関するアンケート」を用い、共通理解につとめることにできた。 (課題)校舎内外・昇降口での自然な挨拶ができるように更にすすめる。	毎日の立哨指導を欠かさずに、教員自らの声かけを積極的におこなう。			
	特別支援を必要とする生徒の支援と、関係分掌との連携を密にし、明るく健全な生徒の育成に努める。	3							
	アンケート「教えてください」を活用し、「いじめ等」のアンケートを基に個々の生徒理解に努める。	4							
	職員と生徒が自然に挨拶をかわす、明るい校風の確立。	3							
部活動の活性化と学校行事を通じて積極的に取り組む生徒を増やす。	人権教育部との連携を図り、合同ホームルームの充実を図る。	4	4	4	(成果)悪天候でクラブ員の学校行事への参加ができなかった日があったが、3学期にトータスロードの清掃などで十分に成果があった。 (課題)生徒会と連携し、さらに学校行事への参加をすすめる。	クラブ員の協調性を高める。			
	学校行事において、生徒会役員およびオリタターとの連携を密にし、その充実を図る。	3							
	文化祭実行委員会の活動を補佐し、その充実と活性化を図る。	4							
	生徒が、高い学習意欲を持ち、自主的に学習に取り組む姿勢を育てる指導体制をめざす。	4					4	4	(成果)校外模試 年度当初に校外模試の日程・時間割を発表したため、実施日を目指して準備できた。センターの分析においてはセンター試験実施の3日後には生徒に配付することが出来た。 3年生の「大学フォーラム」、2年生の「学部学科説明会」、1年生の「職業人講話」を実施した。 (課題)2・3年生に関しては、志望校への執着心がないまま模擬テストを受験している。また、実施後の復習指導に改善の余地がある。キャリア教育に関して、講演会などの機会が極端に少ない。
集会・面談等を通じた意識付けを行うとともに、キャリア設計に対する理解を深めさせる。	4								
生徒が、高い学習意欲を持ち、自主的に学習に取り組む姿勢を育てる指導体制をめざす。	4								
実力養成講座を通じて、目的意識を持って自主的に学習する態度を養う。	4								
保護者に対し、必要な情報を伝えるとともに、意思疎通を図る取り組みを行う。	保護者対象の進路説明会を行い、進学・就職に対する理解を深めてもらう。	4	4	4	(成果)2・3年生の保護者に対しては、進路講演会を実施し、大学入試環境と本校生の課題を理解していただくことが出来た。5月の「育友会大学見学会」、7月・12月に実施した「大学懇談会」、9月に実施した「地方国公立説明会」で例年以上の保護者が参加して下さった。 (課題)入試制度が大きく変わる1年生の保護者への案内が十分ではなかった。	近年の大学入試の難化が「定員の厳格化」に端を発していることや、新制度の進捗状況など、いっそうきめ細やかな情報を発信することが必要だと考える。 1年生が受験する入試に関しては制度がまだ定まっていないうえ、分かる範囲での情報を提供することが大切だと思う。			
	配布物を通じて、保護者に情報を提供する。	3							
	各種の情報提供を行い、研修会を実施するなど、本校の実態と大学受験の現実に対する共通理解を深める。	3							
	あらゆる教育活動を通じて、生徒が向上心を持って取り組めるよう指導する。	3					4	(成果)年度当初に前年度の進路状況を先生方に説明させていただき研修会を開催できたので、受験環境に対する共通理解が出来たと思う。 3年生に対しては数回あった学年集会で、1・2年生に対しては類型・科目選択の機会に進路について指導することが出来た。 (課題)情報過多と情報不足の折り合いが難しい。	先生方が気案に進路指導室に情報を得て来ていただける環境を作る。 キャリア教育としてはカリキュラムマネジメントの視点からランドデザインを早急に策定する。
外部で得た様々な情報・データを示し、教員全体で指導についての共通理解を図る。	3								
あらゆる教育活動を通じて、生徒が向上心を持って取り組めるよう指導する。	3								
あらゆる教育活動を通じて、生徒が向上心を持って取り組めるよう指導する。	3								

人権教育部	さまざまな人権問題を自らの課題と考へて、周囲のなかまと力を合わせて解決していく生徒を育てる。	3年間を見通した人権ホームルーム活動の年間計画に沿った取組を推進するために、指導案の作成や資料等の収集に努める。	3	3	4	(成果)概ね年間計画に沿って人権ホームルームを実施した。1学期に生徒指導部と連携して講演会を実施した。校内人権作文集を発行し、各クラスで展開した。 (課題)人権問題と自己との関わりについて考えを深めさせ、十分作文に反映できていない。多くの先生方が多忙のため研修の機会を奪われている。	人権問題を深く考える糸口を見いだせるような講演・研修内容を計画する。
		他の分掌と連携しながら、多角的に人権問題にアプローチできるような工夫を行う。	3				
	人権について発信する機会を月1回設けて、人権問題を日常的に考えられるように努める。	4					
	他者との個性のちがいをよく理解し、共に社会生活を送ることのできる生徒を育てる。	ろう学校との交流会を複数回実施することにより、社会における共生の在り方について考える機会とする。	4	4	(成果)ろう学校との交流会を2回実施することができた。 (課題)交流の成果を学校全体で共有できていない。	交流内容の校内への広報に努める。	
健康教育部	健康的で安定した学校生活を送れる態度を育成する。	各種検診等の結果を踏まえ、自ら健康的に生活できるような態度を身につけさせる。	4	3	4	(成果)健診後の治療率について、健診当日に結果を個々に返す取り組みによって、歯科健診後の医療受診率(治療率)は向上した。 (課題)全体的には少数であるが、未だ事後の治療を受けない生徒がいる。	より精度の高い健康診断実施のために健診のあり方や事前準備を考える。
		医療勧告書などにより生涯にわたって健康的に生活していける態度を涵養する。	3				
		掲示物などを用い校内においても健康に対する啓発活動を展開する。	3				
	運動・食と健康の関連性を理解させる。	体育行事を通して運動と健康との関わりや必要性を理解させる。	4	4	4	(成果)本年度体育行事が不規則な形で行われたが、運動部員や体育委員が臨機応変に対応でき、運営に携われた。食育については教科と関連して展開できた。 (課題)食育について全体での展開には至っていない。	保健体育に関連した講演会など全体の研修を考える。
		体育行事や部活動を通して一体感や愛校心を育成する。	4				
		食習慣の実情把握に努め、正しい食習慣を実践できるような態度を育てる。	3				
学校内外の環境美化に努める意識を育てる。	自主的に校内外の環境美化活動を推進できる態度を育成する。	4	4	4	(成果)防災訓練を通して災害に対する意識を向上させるなど啓発活動を行った。文化祭など学校行事における環境美化に美化委員が中心となって努めた。 (課題)ごみ出しの分別について若干課題が残った。	日々の清掃や特別清掃について自主的かつ責任を持って行動できるような規範意識を育てていきたい。	
	校内において分別収集などを推進し生涯にわたり循環型社会を担うことを理解させる。	4					
	購買の利用やマナーの向上のための啓発に努める。	3					
文化図書部	読書習慣の確立	各教科・各分掌との連携を図り、蔵書の充実を行い、年間貸出し冊数2000冊以上をめざす。	4	4	4	(成果)貸出冊数は2000冊以上であった。図書委員会は毎学期開催し広報活動を積極的に行うことができた。 (課題)3年生の貸出冊数が少ない。	各教科・各分掌との連携を深め、蔵書の充実を図る。
		図書委員会を学期毎に開催し、広報活動を充実させる。	4				
	文化・芸術・伝統への理解推進	文化鑑賞会を年1回開催し、文化に対する意識を高める。	4	4	4	(成果)文化鑑賞会、カルタ大会、文化講座を開催し古典文化や異文化に触れ文化への理解と関心を高めた。文化委員会は各学期開催し、行事の準備に努めた。 (課題)日程などのこともあり、文化講座を1回しか開催できなかった。	各教科・各分掌との連携を深め、文化行事の充実を図る。
		百人一首カルタ大会を開催し、日本古典文化への理解と関心を深める。	4				
	文化委員会を学期毎に開催し、文化祭や文化講座などの充実を努める。	3					
生徒会指導部	生徒会活動を他分掌と連携して、生徒同士の連帯感や母校愛を高める。本校生徒が、アクティブ・ラーニングで培われたプレゼンテーション能力をあらゆる場面で生かせるようにつとめる。	各学期に1回以上、各専門委員会独自の取り組みを行い、生徒会本部と連携できる取り組みもできれば行う。	3	3	4	(成果)各委員会独自の取り組みを実施できた。オリター及びフレッシュマンミーティングに対する満足度は達成した。 (課題)集会を生徒の心に伝わる一体感が得られる取組を考える。	キャブテン会議や部活動集会以、生徒が、日頃のようなことに励み、悩んでいるのかを生徒同士がわかり合える場を設定する。
		フレッシュマンミーティングやオープンスクールでの新入生(新入生候補者)および本校オリター参加者の満足度を80%以上にする。	4				
		キャブテン会議・部活動集会以各学期に必ず行い、部活動ごとの規律面だけでなく、母校愛を育てるために校歌や部活動の効用などを共有する時間をもっていく。	3				
	開かれた学校として、「地域とともにある学校づくり」を双方向で発信していく。	地域の教育機関だけでなく、地域の皆さんと連携する行事を3回以上行う。	4	4	(成果)多機能複合型介護施設との連携をはかれた。 (課題)地域との連携をより深める必要がある。	地域の人たちの力を本校に組み入れる取組を、学校として行事の精選の中で考えていく。	
分掌内の分担内容を明確化し連携につとめ、全職員を牽引していく。	全体の動きが分かるよう、行事細案を立てる。	4	4	(成果)各行事ごと、学年ごとに部内の教員がリーダーとして動けた。			
国語科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	3	4	(成果)生徒自身による学習成果の振り返りができた。 (成果)音読やチャレンジタイムでの小テストにより基礎力の向上に努めた。 (課題)文法理解の定着において個人差が大きい。 (成果)図書室と連携し、関連教材の提示を行った。 (成果)ペアワーク等を取り入れ、生徒の主体的な学習態度の涵養に努めた。 (課題)文章読解の時間確保のため、表現に充てる時間的余裕が足りない。	生徒の実態に即したワーク・ドリル教材の効果的な活用を考える。 効率的な読解指導を研究する。
	日々の授業を通して基礎・基本の徹底をはかる。	音読指導を単元毎に行い、言葉に対する感性を高める。	3				
	授業の範囲に留まらず、日常の生活の中で語彙や活字に対する興味を喚起させる。	古典文法を理解させることに努め、50%以上の生徒に基礎力の定着をはかる。	3				
		新聞教材など話題性のある教材や作品を効果的に扱う。	3				
	国語の様々な分野で自己表現の実践の場を多く持ち、生徒に自信をつけさせる。	アクティブラーニングをふまえた自己表現の時間を10%設定する。 様々な場、形式で「書く・発表する」ことで、表現の楽しさを味わい、自己表現に対する抵抗感を軽減する。	3				
地歴・公民科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	4	(成果)生徒の自己評価を参考に授業を改善し、生徒がより一層学習内容に興味・関心を持ち、着実に学力向上が図れるよう配慮した。 (課題)チャーク&トーク型授業の工夫。 (成果)ビデオ、写真、図表等々の利用を進め、概ね10%程度視聴覚教材の利用は達成できた。 (課題)視聴するだけで終わってしまうこともあり、その知識を次につなげる工夫が必要。 (成果)調べ学習については、主体的学習の基本的な部分として積極的にを行い、回数も増えた。 (課題)調べ学習は宿題が中心で、授業時間内に図書室等を使って実施することができなかった。 (成果)概ね、学期に一度の発表学習を行うことができた。 (課題)発表に至るプロセスから得ることが可能な学習成果(キーコンピテンシーの育成)を軽視した。 (成果)単元に一度のペアワークやグループワークは多くの科目で実施することができた。 (課題)学習手段であるはずのペアワーク・グループワークを目的化してしまったところがあった。 (成果)ほとんどの科目で、小テスト、レポート等を単元ごとに課し、学習状況を確認することができた。 (課題)アクティブラーニング等の実施を考慮し、活用できる知識の習得を考える必要がある。 (成果)単元ごとにとまではいかなかったが、資料を読む機会をはできるだけ多く持つよう努めた。 (課題)資料を読み解き、それらをどの程度活用する必要があるのかを示すべきであった。	相互の授業協力・参観等を活発に行い、授業の状態を随時チェックしていく必要がある。 アクティブラーニング型授業等を実施する中で、生徒に実際に力がついているのか確かめながら進める必要がある。 教科内で更に研修を積み重ねる必要がある。 授業を計画する段階から活用できる知識の習得を視野に入れて、模擬的な活用場面までしっかりと設定した授業の構成を考える必要がある。生徒の興味を引き出す授業の展開、一方的にならないことを目指す。
	地理・歴史・公民に対する関心を高め、知識・理解を深めることを通じて、地理的・歴史的・公民的思考力を培う。	視聴覚教材の積極的な利用(年間授業時間数の10%程度は用いる)を進める。	4				
	アクティブラーニングを実施することを通して、21世紀を生きる根源的な力(キーコンピテンシー)を育成する。	学期に一度は、図書室等を利用して調べ学習を実施し、生徒が自主的に学び、活動する機会を設ける。	3				
		言葉・情報・知識等を活発に活用するために、探究型・参加型学習の一環として、学期に一度は発表学習を行う。	3				
	学習仲間と関わり、協力するために単元に一度はペアワーク・グループワークを行う。	4	4				
知識の定着を目指し、レポート、小テスト等を単元ごとに一度は課し、学習状況を確認する。	3	3					
日常的学習活動の中で、基礎・基本の充実を図る。	論理力の育成を図るために、単元ごとに一度はまとまって資料を読む機会を持つ。	3	3				

数学科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4		(成果)シラバスを活用することにより、考査後の振り返りをすることができた。しかし、わかっていないつもりでも、実際に「できる」とは違うので、そこで自己評価との乖離が生まれている面もある。観点別評価については、各観点ごとの成績の偏りをなくすよう、小テスト、定期考査などで、出題分野・内容を考査している。	考査前、模試前以外の時期で、生徒の学習意欲を高めることが急務である。
	基本的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばす。	苦手な生徒には個別指導を行い、追認考査対象生徒をなくす。得意な生徒には問題集を自主的に解かせ、実力養成講座への参加を促す。	3		(成果)数学が苦手な生徒も、意欲的に補習に参加し、考査前には数学の教員を探して質問する光景が見られた。得意な生徒は、次々と自主的に学ぼうとし、実力養成講座にも積極的で、さらなる応用力をつけている生徒も多く見られた。また、そのような生徒に対しても助言をすることができた。	模試対策を行う時期や、小テスト、提出物の時期を再考し、目頃から継続的に生徒に学習させるように計画を立てることが必要である。
	家庭学習の習慣を身につけさせる。	必ず宿題を出させる。提出物の期限や定期考査直前に学習を始めるのではなく、普段から計画的に学習するように指導する。	4	4	(成果)宿題の提出率は改善されているように思われるが、提出期限ぎりぎりに取り組み、中身が薄いものが多い。(課題)家庭学習の習慣も定着しているとはいえず、定期考査や小テストの直前になって焦る生徒を少なくする。	数学が得意・好きな生徒においては、現在の授業でも余力がある状況なので、習熟度別授業を活かしてさらに応用的な問題に取り組み、個人的に声をかけてもつと難しい問題に取り組みように指導していくことが必要であると考える。
	日々の授業を通して、数学的な見方や考え方を認識し、数学の楽しさ・おもしろさを感じられる生徒を育てる。	授業に集中させ、興味・関心をもたせる教材を工夫する。身の回りの現象を数学的にとらえた教材を積極的に授業に取り入れる。また、そういった問題を解くとき、グループワークなどのアクティブラーニングを取り入れた授業を行う。	3		(成果)数学に興味・関心を持つ生徒もいるが、一部に限られている現状である。難しい問題を解くときに周りの人と学び合いをするなど、意欲的な面も見られ、協同的な学習ができた科目もある。	
理科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3		(成果)個人別振り返りシートの導入により生徒個々の状況がよくわかる。学習のためには何が必要であったか確認できるようになってきている。こちら主点であることが改善点である。	よりいっそうの興味・関心を持たせるために、毎授業何かに触れさせ考えさせることが望ましいが、環境では難しい面があるので、授業内容に合わせて工夫を行う必要がある。できる限りモデルや器具に触れさせ、原理を追求させるような授業展開を心掛けるために、綿密な学習計画を立てていき、ICT機器やプログラム、ソフトを用いることが効果的であると考える。
	教材研究の時間を確保し、生徒が主体となる授業を心がける。	身近な事例を取り上げ、仕組みを考えさせる。各授業で「なぜ」と思わせ、その解消の手助けをする。	4		(成果)現段階での生徒の到達度より、授業のスタイルを柔軟にあわせる事ができている。生徒自身が考えを深める時間を作り、興味や関心を引くような教材作りを心掛けている。(課題)ICT機器をさらに用いて本物に近いものを提供したい。	
	各単元に対応した実験を行い、自然科学に対する興味・関心を高めさせる。	各考査毎に1回は本物を体験させる。学期に1回は生徒に実験をさせる。実験器具の管理を確実にを行う。	4	4	(成果)今年度は、学習内容に応じて必ず映像を見せたり実験を行っている。来年度も継続して観察・実験を行ってきたい。	
	理系学部進学希望者の進路実現を目指す。	個々の生徒が必要としている情報を厳選して集める。入試問題を研究し、入試に対応できる実力の向上を図る。	4		(成果)個々に応じた様々な対応を行ってきた。最新の情報や現況を吟味し、個人の意志に沿った形での進路指導を行っており、また実力養成講座も充実させている。来年度も継続して行いたい。	また、そのときの生徒の反応に応じて柔軟に対応していく必要も感じられる。
保健体育科	運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	1・2年生の授業でグループ学習、2・3年生についてグループノートの内容の充実を図る。運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	4		(成果)グループ学習において、生徒同士の話し合いの機会を設けたり、グループ毎のノートや学習カードによって生徒自身が授業を振り返ることにより、生徒の習熟状況に合わせた指導を行うことができた。(課題)AL型授業並びに評価の観点を生徒へ示す方法を明確にしたい。	教師主導型の授業から、生徒自身が主体的に取り組む授業形態を多く用いる。評価基準や評価方法を生徒に示すことにより、毎回の授業において、どのように評価しているのかを、明確にする。思考・判断や知識・理解の評価においては、学習カードやグループノートを活用するとともに、生徒の実態把握と生徒の課題解決の手立てとする。体育理論の授業内容を充実させ、生徒間の意見交換などを行い、生涯にわたってスポーツに取り組む態度を育てる。
	運動の合理的な実践を通して、健康の保持増進と基礎体力の向上を図る。	体調に応じて運動量を調整したり、仲間や相手の技能・体力の程度に応じて配慮できる能力を育てる。体育理論では、スポーツの意義や歴史、文化的特徴の理解およびスポーツに対する意識の向上を図る。	4	4	(成果)年間を通して、準備運動や補強運動を継続し体力の向上に努めることができた。また、グループ学習によって、自己の健康状態だけでなく、仲間や相手の技能や体力なども考慮しながら話し合いや練習、試合ができた。	生涯にわたって健康を保持増進させるため、体育実技の授業との保健授業との関連を密にし、発達段階に応じた健康課題を理解させ、自ら健康管理が実践できるように育成する。
	健康と安全について総合的に理解を含め、これらの今日的課題に対し、主体的に取り組む、改善・維持・管理していく力を身に付けさせる。	生き生きとした社会生活を送るために必要な健康に関する知識を習得するために、生活習慣の指標を身に付けさせる。応急手当やAEDの使用方法を含めた心肺蘇生法の手順を身に付けさせる。	4		(成果)生涯の各段階における、健康課題に応じて、自らがこれに適切に対応するために、健康に関する知識を活用・実践できるよう指導することができた。また、応急手当や熱中症対策、心肺蘇生法(実習含む)について学習し、適切な応急手当や処置によって、傷害や疾病の軽減や人命救助につながる意識を身につけた。	
音楽科	様々な音楽における興味・関心・意欲を養わせ、幅広い音楽における鑑賞能力を高めさせる。	古今東西の幅広い音楽にふれる中で、自ら様々な音楽活動に取り組む姿勢を身に付け、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育成するとともに、より一層深い鑑賞能力を育成する。	4	4	(成果)全体的に多くの生徒が様々な音楽活動に意欲的に取り組んでいた。(課題)生徒個々が音楽における諸能力を向上させていけるように、様々なレベルに対応しながら、モチベーションのさらなる向上を目指し、工夫を重ねていきたい。	すべての生徒が意欲的に音楽の諸能力をバランスよく向上させていけるように、授業展開に工夫をしていきたい。
	音楽における豊かな表現力や独自の創造力を高めさせる。	読譜力を高めるとともに、幅広い歌唱・器楽演奏活動を通して、表現力をさらに高め、また、自ら音楽を創造する能力を育成する。	3		(成果)音楽科における基礎基本となる諸能力を身につける時間を確保しながら、生徒個々の演奏能力や表現力、創造力を高めるような授業を展開したい。	
美術科	見る・描く・作るの基礎を身につけ表現する喜びを体験させながら、様々な美術作品に関する知識を身につけさせる。	デッサンの基礎能力を身につけて、画材・用具の多様な表現力をつけさせる。美術史上の画家や、その生涯と作品について知り、名画の鑑賞能力を身につけさせる。	4	4	(成果)手、人物、静物をデッサンすることで、鉛筆、ペン、水彩、アクリルガッシュ、版画等、様々な画材の用具を使い、その特徴を生かした表現ができた。また、美術史を学び、11名の画家の名画や人生、時代背景を紹介することで、生徒は興味を持ち、熱心に学ぼうとする意欲が感じられた。作品制作には学習意欲が大切なので、より伸ばしていく必要がある。	芸術は才能に恵まれた者のものではなく、自分の思いを表現することであるということを経験し、楽しく制作している様子も見られるので、作りたい思い(自発性)、表現の追求(自主性)、完成の喜びと意欲(主体性)を伸ばしていきたい。
	美術を愛好する心情を育て感性を高めさせる。	それぞれの個性を認識させ、それを活かす方法を考えさせる。	3		(成果)4つの自画像では、自己の内面を抽象画にしたり、カレンダー制作や色彩構成絵本制作においても、それぞれの個性を生かした表現ができた。	
書道科	書の歴史を学び、名品名跡の鑑賞力を身につけさせる。日常における書写能力を身につけさせる。	できるだけ多くの名品名跡にふれ、古典臨書にじっくり取り組ませる。実用的な書写に取り組みさせる。生活の中の様々な書に目を向けさせる。	4	4	(成果)多くの古典作品にふれることで、臨書、鑑賞を中心に学習を進めることができた。漢字仮名交じりの書では、自分なりの創作にも取り組んだ。ペン字やのし袋の書き方、様々な書作品を紹介することで、書が身近にあることが認識できた。(課題)本校生は個人の能力差が大きいので、それをどう指導するかが課題である。	個人の能力の差が大きいので、個に応じた対応を心がけつつ、それぞれの表現のよいところを引き出せるような指導の工夫をしていきたい。
	書美を表現する力を身につけさせる。	古典臨書を通じて様々な表現技術を身につけさせる。作品制作に意欲的に取り組ませる。	3		(成果)各古典による特徴の違いを自分なりに意識し、表現しようとしていた。篆刻では、小さな石の中で表現される美の世界を理解し、創作できた。	
英語科	より良い評価方法の確立	シラバスやCAN-DOリストを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	3	(成果)シラバスを活用し、生徒自身の自己評価をさせることができた。(課題)CAN-DOリストの積極的な活用までには至っていない。	CAN-DOリストの活用について教科で話し合う機会を設ける。
	4領域(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく学べるよう、生徒が英語に興味・関心を持つよう指導の工夫をする。	定期考査や授業を通して、生徒の4領域の学習度合いを測る。また、課題や小テストを定期的に行い、到達度を把握し、きめ細かい指導を行う。 各学期に1回、英語検定などの検定を紹介することで、生徒に関心を持たせ、指導に努める。 3年1学期、1、2年3学期にGTECを実施し、CTを活用するなどしながらリスニング力やライティング力の向上に努める。	3	4	(成果)指定研究の機会を活用しながら、4技能の活動をバランスよく行う授業のあり方を研究することができた。検定受検者を大幅に増やすことができた。GTECは3年生で4技能の検定型を実施することができた。 (課題)英語表現の授業や考査で、4技能をバランスよく伸ばし評価するのは容易ではない。	普段の授業や考査の中で、とくに「聞く」「話す」領域の活動、テスト、評価の具体的方法を教科でさらに模索していく。
	リーディング力の向上に必要な語彙力や、文法力を定着させる。	教科書、補助教材を活用し、最低でも毎週1回単語テストを行い、語彙力の強化に努める。 リーディングの基本となる単語については、1年生で2000語、2年生で3500語、3年生で5000語の習得を目指す。 1、2年生は少人数編成による講座の実施により文法力の強化を目指す。また3年生では実力養成講座等で生徒のニーズに応じた指導を目指す。	4	4	(成果)定期的な単語テストを継続して実施することができた。各学年で実力養成講座を実施し、さらなる読解力の強化に努めた。 (課題)単語テストで培った語彙力が読解の中で生かせない現状である。	文章の中で語彙力をつけることができるよう授業を工夫し、テストのための勉強ではなく、より定着を目指した学習方法を生徒に提示していく。
	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4		(成果)観点別評価を意識した学習ができた。	さらに観点別評価のわかりやすさを工夫していく。
家庭科	人の一生と家族・家庭及び福祉・衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得する。	分野ごとに実習や演習など体験学習を行う。 アクティブラーニングを活用した学習を学期毎に取り入れる。 観点別評価を取り入れるとともに、生徒の自己評価表を活用し学習効果の向上に努める。	3	4	(成果)各分野毎に実習や演習を取り入れ体験学習の充実ができた。(課題)生徒の生活体験が少なく、道具の名称の理解や器具の扱いに多くの時間があつた。	生徒の実態に合った教材や学習方法をさらに精査していく。
	家庭や地域の生活課題を主体的に解決する実践的な態度を育てる。	ホームプロジェクトに年2回取り組ませる。 学校家庭クラブ活動を充実させ、参加させる。	4		(成果)県の副会長校としてリーダーシップをとることができた。ホームプロジェクトを実施し、学習を各家庭に広げることができた。	
情報科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3		(成果)4観点のバランスをとれるような評価計画を立てて実施できた。シラバスで計画を明示し、終わりには自己評価表により自己点検ができた。 (課題)授業で身につけた力がどのように社会の中で活かされるのかを考えさせる必要がある。	情報モラルについて、知識のみならず、実社会で実践できるような授業展開を考える。
	情報機器を問題解決に効果的に使えるようにする。	プレゼンテーションソフト、表計算ソフトを使用する実習を行う。 教室での教科書をベースとした授業と情報学習室での実習の授業を行う。	4	4		